

Communication
Breakdown

コロナ禍にもめげず、通勤電車の混雑ぶりは相変わらずで、混み合う車内はかつて新聞を広げる通勤客が肩を並べていたのだが、昨今は軒並みスマートフォン（スマホ）を覗き込む姿で溢れている。

混雑する時間帯でなくとも、電車に乗れば向かい側の乗客が片端からスマホに見入っている姿は今や日常であり、周囲に視線を向けることすら稀なように見受けられる。

それは完全に「個」の世界であり、電車の車両内はその「個」の集合体と



様々な場所で間隔を空けて座ることが日常化した

ソーシャルディスタンス

ジャーナリスト

三木寛郎

化してしまうのである。

新型コロナウイルス感染症の拡大とともに、「ソーシャルディスタンス」（社会的距離）なる用語が登場し、公共機関や病院のみならず、様々な場所での椅子に「X」マークが印され、間隔を空けて座ることが日常化した。何か交通機関のシートにはこのルールは適用されず、隣同士が肩を触れ合せて座る図はこのパンデミック前から変わることがない。せいぜい見られたのが路線バスにおける最前列の席の封鎖だが、「飛沫感染防止の観点から乗務員とお客様との距離を保つため」というお題目が明示されているが、それなら乗客同士は「飛沫感染防止の観点」は無視されてしまうことになってしまふ。

そうした環境の中で、多くの乗客たちはそれぞれ自分のスマホに見入り、その画面の中の世界に没頭し、周囲に一瞥さえ與れない。だからお年寄りや

体に不具合のあるような人が乗り込んできて、全く気が付かないような状況が発生してしまうのだ。

少なくとも大都市における鉄道の車内では、物理的な距離は全く顧みられることがないにもかかわらず、精神的には隔離されてしまっているのと同じ状況なのではないだろうか。

公共交通機関というのは、いわば庶民の乗り物であり、それぞれの乗客が譲り合って利用することが前提となっている。一方的に自らの権利や欲望を主張するのではなく、「お互いさま」という原則に則っているものなのだ。

ところが、扉が開いた瞬間に、降りてくる乗客をかき分けて乗り込み、ちゃっかりと座席を確保する輩は後を絶たない。そうして確保した、物理的に「ソーシャルディスタンス」が保たれていない環境下でスマホに見入り、今度は周囲から隔離された世界に没入するのである。

規模は違うが精神は同じ？

距離感の読めないロシアの侵攻

さてスマホの画面を離れて、より大きな視点で世界を見れば（スマホの画面にも世界のニュースはあるのだが）、目に飛び込んでくるのは、心無いプーチンによるウクライナへの不条理な侵攻である。

プーチンにはプーチンなりの理屈はあるのだろうが、それは果たしてここまでの暴力と破壊、そして人命軽視の軍事行動に値するものだろうか。

第2次世界大戦終了後、アメリカとヨーロッパ諸国が主導するNATO（北大西洋条約機構）とソビエト連邦（現ロシア）が主導するワルシャワ条約機構という2つの軍事同盟が生まれ、東西の対立構造が発生した。いわゆる冷戦構造である。ところが、1991年にソ連が崩壊してしまふと、NATO側はバルト3国と呼ばれるエストニア、ラトビア、リトアニア、



ロシアにとって「凍らない港」は極めて重要な存在なのだ

さらにルーマニア、ブルガリア、クロアチア、北マケドニア、モンテネグロ、アルバニアといった国々を取り込み、完全なロシア包囲網を形成してしまったのだ。そして、唯一残ったのがウクライナだったのである。

なぜロシアにとってウクライナが重要だったのか、それは端的に言ってしまうえば「凍らない港」の確保に他ならない。厳寒の地に位置するロシアにとっては、冬の時期に閉ざされることのない「凍らない港」は極めて重要な存在なのだ。言い換えれば、北欧のフィンランドとスウェーデンはNATOには加盟していなかったが、ロシアにとつての「凍らない港」足りえず、ウクライナは最後の「一線」だったともいえるだろう。

だからウクライナがNATOへの加

盟をほのめかしただけで、プーチンは色めき立ち、今回の暴挙に出たと見るのが、もつともわかりやすい解釈ではないだろうか。

この「凍らない港」は、プーチンにとって「立たないで済む電車の座席」に他ならない。そして、それは一方的なロシアの都合であり、ウクライナのみならず、さらにはNATO加盟国のみならず、世界の国々にとつても理解しがたい論理なのだ。

しかも、これまでNATOへの加盟に否定的だった北欧のフィンランドとスウェーデンの2国がNATOへの加盟を決定するなど、ロシアにとっては逆効果となる結論までプーチンは導き出してしまっているのである。

ソビエト連邦崩壊と

中立国の在り方の変化

フィンランドとスウェーデンは、およそ1300 kmに渡ってロシアと国境を接しているが、1995年の欧州連合(EU)への加盟によって、それまでの公式な中立政策から軍事上の非同盟、つまりNATOへの加盟をしていないだけの立場へと変わった。「所属する陣営を公然と選択しないことが平和を維持する最善の方法」として長らく

掲げてきた考えを放棄することになるのである。

余談だが、フィンランドは1917年にロシアから独立した。その独立運動の発端はリョンロートという民俗学者が1800年代末期に民族叙事詩『カレワラ(kalevala)』を採集・編集したことにある。ワイナミョイネンという年老いた賢者が、民族(国家)が危機に瀕したときに復活すると結ばれる、古くから伝わる物語だ。この物語に触発された作曲家シベリウスは「交響詩フィンランディア」が当時帝政ロシアの属国となっていたフィンランドの独立運動の機運を高め、さらに1917年のロシアの2月革命と10月革命がそれを後押しした。さらに当時バルト海からフィンランドの首都ヘルシンキに睨みを利かせていた「バルチック艦隊」が日露戦争における日本海海戦で壊滅したことから、一気に独立を果たしたのである。いまでもこのことを知るフィンランド人は多く、親

日家が多いと聞く。

さらにフィンランドも日本も、第2次世界大戦を契機に領土の一部をソ連に奪われるという共通点もある。フィンランドはカレリア地方を、日本は北



『カレワラ』に登場する賢者ワイナミョイネン

方領土を当時のソ連に一方的に「編入」された経緯を持っているのである。

一方、スウェーデンは200年間戦争をしていない国である。スイスやオーストリア、フィンランド、トルクメニスタン、コスタリカなどと並ぶ永世中立国として知られ、第2次大戦後はフィンランドもそこに加わった。

今回のプーチンの暴挙は、残念ながらそうした中立国の立ち位置にも大きな波紋を広げ、ロシアに対する考え方に変化をもたらしたことは間違いない。

NATOに加盟すれば、スウェーデンとフィンランドは北大西洋条約「第5条」の対象となる。これは加盟国1国への攻撃をNATO全体への攻撃とみなすという規定である。

今からでもロシアは「外交」という武器を手に入れた「凍らない港」を流血と破壊を伴わない形で獲得する道を選ぶことはできるはずだ。